講座　　いのちの躍動の舞　　　　　　　　　　　２０２１年５月１５日

テーマ：　「オリンピックと坐禅」

問題

・聖火とは？　（何の火？　なぜ「聖」なる火なのか？　どこに燃えている？　）

・例えば、百メートルをいかに速く走るかを競う。一等賞にはオリーブの冠が与えられる競争。

　競争、一番を目指すこと、これと仏教（禅）はどう関係するのか？

◎片山敏彦著『ロマン・ロラン』（新潮文庫版）の序文から

　十数年以前に書かれ、大戦後にいくらか書き加えられたこの小著は、ロランの作品の全面的な研究を意図したものではなく、私が三十年以来口ランの存在と仕事とに負うところのものを、**思想のかたちで「感謝の歌」とする**ことであった。ロランの思想の中心へ心の眼を向けることによって、自分が生きる理由に、光と力とを汲み取ろうと願うところが、この著述の動機であった。

　「ロマン・ロラン」と言う表題がこの不完全な小著にとっては重すぎることを十分に知っている私は、今なおロランの魂と思想とについて多くのことを知らない人々、そして、やがてそれを知ることによって**自己の魂と思想とに新しい道のひらけることを感じる運命をもつ人々に、もしもこの小著が一つの火花を与える機会となることがあれば望外のよろこび**を感じる立場に居る。

　「**《永遠なもの》 L'Eternel の種子は、人類のあらゆる畠にゆたかに播かれてある**。 ――**しかしあらゆる土地が、その種子を発芽させる用意をととのえているわけではない。それは、ここでは育ち実るかと思うと、かしこでは眠っているままである**。しかし種子はいたるところに在る。そして眠っていたものが目ざめる一方では、目ざめていたものが眠り込んでしまう。――《精神》は国民から国民へ、人から人へ、常に生きて動いている。そしてどの国民もどの人間も、《精神》を、自分だけのものとして引き留めて置くことはあり得ない。しかし…**《精神》は各人の衷（うち）に在る限りない生命の火である**。―― **それは同一の《火》である。そしてわれわれは、その火を燃え立たせるために生きている**…」(ロマン・ロラン)

**ロランの生涯は、人間の衷に播かれている「限りない生命の火」を守り、はぐくみ、育てるための努力に充たされていた**。かって私はスイスの『ロマン・ロランの友らの書』へ寄稿した一文の題を「限りなく人間らしいもの」としたが、ロマン・ロランほど人間らしい人間は稀有であることの理由は、**彼の思想と仕事とが、常に各人の衷に在る「永遠の生命、永遠の精神」の種子の成長に調和するように生きた**ことにある。私はこの事実を、この小著の中で指し示したかった。そして私がこの一文を「**感謝の歌**」と呼ぶ理由もそこにある。

１９５２年８月蓼科高原にて　　　著者

◎ロマン・ロランの言葉

・私が高校時代に課題図書で読んだ『ベートオヴェンの生涯』の訳者解説（片山敏彦）から

ロマン・ロラン（Romain Rolland）にとってはその少年時代以来、ベートーヴェンは**最大の魂の師**であった。「**生の虚無感を通過した危機に、私の内部に無限の生の火を点してくれたのはベートーヴェンの音楽であった**」とロランは『幼き日の思い出』の中に書いている。…

**「諸君がみずから意識しないときですら諸君は古代の諸彫刻作品の石の心臓に眠っている息を吸い込んでいるではないか。フィディアスの感覚と理性と生命の火との調和を吸い込んでいるではないか。」**

（原文）**Vous ne vous en doutez pas, mais vous respirez**（息をする） **encore** （再び） **souffle**（息、風） **qui dort au cœur de cette pierre**（石）**, l'harmonie**（調和）**de ses sens**（感覚）**et de sa raison**（理性）**, le feu**（火） **de sa vie**（生）**.**

・私の熊野での体験：

　熊野坐神社があった場所で感じた風。

　「オリンピアの風」を感じた。

　これはフィディアスも感じ、戦慄を覚えた風と同じと思った。

◎『ギリシアの神々』ジェーン. E. ハリソン著。船木裕訳。ちくま学芸文庫。

 　フェイディアス［原文Phidias］が、アイスキュロスの時代の理想の数々を、金象牙製の偉大なゼウス像に造形したのは、はなはだ幸運なことでしたが、さらに幸運なのは、その神像の観察者たちの記録が一部残されていることです。クウィンティリアヌス（12巻の９）は、オリュムピアのゼウス像について「**その美しさは啓示宗教［超自然的啓示を根拠とする信仰］に対して新たにあるものをつけ加えたように思われる。**」と述べています。

　ディオ・クリュソストモス［紀元40－112］（12巻14）はこう書いています。

　「ヘラス［ギリシア民族］が心一つにまとまり、内紛で党派の争いなき時は、ヘラスの守護者たるわれらがゼウスは、平静いてまことに温厚。完全な形をした優しくも威厳のある完備の相、**生命と呼吸と一切の良き贈物とを授ける存在、《人類共通の父親、救い主にして保護者》**である」

　［このゼウス像は］**われら死すべき人間にとって、不滅の神聖なる属性を心に抱き、形象に表現することのできる限界に達している。その神像は、これを眺める者の悩み多き心に、おのれの比類なく大きな慰安をもたらした。というのは「もしかりに、われわれ死すべき人間のうちで、魂に重荷を背負い、その人生であまたの悲哀と災禍をいたく蒙りながらも、なおみずからに甘美な眠りを得ることの叶わぬ者があるとしても、そのような者でさえ、その神像の前に立つときは、はかなき人の世のいかに耐え難い事柄もことごとく忘れ去るだろう。そう思えるまでに素晴らしく、フェイディアスよ、そなたはその像を心に描き、形に作り上げたのだ。かくも優雅な光輝［ギリシャ語の原文：**φῶς**と**χάρις**］がそなたの技術から作品に照りそそいでいる。**」

◎ディオン・クリュソストモス著［40年頃から114年以降。ギリシアの弁論家］

『トロイア陥落せず　弁論集２』内田次信訳（京都大学学術出版会）から。

「オリュンピアのゼウス像と神の観念――詩と彫刻の比較」

（オリンピックが行われている最中、97年か101年か105年にゼウス神殿でなされた講演）

　この像は、あなたたち［エリス人］の祖先が、惜しみない出費をし、最高の技術者［ペイディアス］を得て作り上げ、奉納したもの。地上にあるすべての神像のうち最も美しく、最も神に愛されている作である。伝えによると、ペイディアスは、ホメロスの詩と競い合おうとしたのだという。つまり神が、眉を少しうなずかせるだけでオリュンポス全体を揺り動かすという詩句のことである。

　詩人は以下のように、とても生き生きとした描写を、確信を持って行なっている。

　クロノスの子［ゼウス］はそう言うと、青黒い眉でうなずいた。

**神々しい髪が、王の不死の頭から**

**ゆさゆさと垂れ、高大なオリュンポスは振動した**。

（注から抜粋）「世界の七不思議」の一つに数えられたこのゼウス像（前430年頃完成と推定される）に関する記述として、他に、パウサニアス［115‐180頃］5-11-1以下、クインティリアヌス［35‐100頃］12-10-9（**伝統的な宗教に新たな要素を付け加えた**、という）、キケロ［紀元前106‐43頃］『弁論家について』2-8以下、エピクテトス［50‐135頃］『ディアトリバイ（談論集）』1-6-23（これを見てから死ねという趣旨のことが言われている）など参照。

　組み上げた木材を中核とし（ただし骸骨状で中空であり、ネズミが巣食っていると風刺家ルキアノス（『鶏』24）は皮肉っている）、肌の部分には象牙が、髪、衣服部やサンダルには金箔が張られていた（髪の房の一部は金塊製だったかもしれない）。黄金の総量は一トンを超えたかとBäblerは推測する。黒檀製の王座に坐し、立ち上がれば神殿の屋根を持ち上げてしまうだろう（ストラボン8-3-30）と思われた巨大さ（12メートル強）を有していた。

　カリグラ帝がローマに運ぼうとして失敗。しかし後五世紀初めまでには、コンスタンチノープルのラウソスという廷臣の宮殿に運び去られ、そこで475年に火事に会って炎上した。

（注）ストラボン［紀元前64‐紀元後24］（8‐3‐30）では、何をモデル（パラディグマ）にしてゼウス像を作るつもりかと甥のパナイノス（像の共同制作者の画家）に訊かれた**ペイディアスが、このホメロスの句を挙げたと言われる**。

（岩波文庫『イリアス（上）』松平千秋訳）こういってクロノスの子が漆黒の眉を俯せて頷いて見せると、神々しい髪がゼウスの不死なる頭から靡（なび）き垂れて、オリュンポスの巨峰もゆらゆらと揺れ動いた。

 【49】誰かが、まずペイディアスを――荘厳でこよなく美しい作品［ゼウス像］の巧みな神的な制作者たる彼を――ギリシア人の前で糾問する、ということにしよう。…

【50】… 制作者のうちで最も優れた第一人者たる君よ、これまでここへ頻繁に群れをなしてやってきたギリシア人と異国の者すべてのために、**君が、快い魅力的な見ものを、言い表わしがたいほど喜ばしい鑑賞物を、作り上げたということは、誰も否定しないだろう**。

【51】じっさいそれには、理性のない動物たちの種族も、もしそれを目にすることができたなら、驚嘆させられたであろう――その見ものに喜びを覚えて、ここの祭壇へひっきりなしに引いてこられる牡牛は、この神に感謝を捧げることになるなら、犠牲式の神官に進んで従う気になっただろうし、鷲や馬やライオンは、馴らされていない野生の心を鎮めて、きわめて穏やかに振る舞うようになったことだろう。

　また**人間で、その生において多くの禍いと苦悩を味わい、快い眠りすら自分に与えられずに胸中苦悶している者も、この像の前に立てば、人間の生に出来（しゅったい）する恐ろしい辛い経験をすべて忘れてしまうことだろう**。

【52】君は、そのような見ものを考案し作り上げた。それはまことに、

**悲しみや怒りを抑え、すべての禍いを忘れさせるもの**

である。**君の技が生み出した作品にはそれほどの光（**φῶς**）、それほどの魅力（**χάρις**）が備わっている**。そして［鍛冶神］ヘパイストスすら、人間の目が味わう快感と喜びに照らして判断するかぎり、この制作物に非難を向けることはまずないだろう。

（注）ホメロス『オデュッセイア』第四歌221行。

【55】これに対してたぶんペイディアスはこう答えるであろう。…

【61】ちょうど、父や母から引き離された幼い子供が、強烈な憧憬と思慕に胸を充たされ、しばしば彼らの夢を見ては、そばにいない彼らに両手を差し伸べるように、人間も、自分たちが受けている恩恵と、神々との同族性のゆえに、正当にも彼らを愛していて、あらゆる仕方で彼らと接し交流することを願いながら、彼らに向けて腕を伸ばすのだ。

【73】それらの像［ホメロスの詩で示された神々］には、穏和なものもあるが、慄然とさせる恐ろしいものもある。

【74】しかしわれわれの像のほうは平和的であり、あらゆる面において柔和である。それは、ギリシアが、内紛に陥らずに協和していられるよう監視する神にふさわしい。わたしが、自分の技を試しつつ、賢明な善良なエリス人の国と相談しながら作って据えたこの像は――把握しがたい神的な性質を模写しようと企てた者に表現しえたかぎりで――穏和であり、憂いを示さぬ姿態の中で荘厳な様子を保っている。**命（**βίος**）の糧と生命（**ζωή**）とあらゆる恵みとの授与者、人類に共通する父にして、救い主でもあり守護者**でもある方をそれは表わしている。

【77】これらのことを言葉の助けなしに表わしえたかぎりにおいて、この［ゼウス］像は、われわれの技術を十分発揮しているのではないか？　…『友の』、『嘆願者の』、『客人の』、『避難者の』といった類いの性質は、総じて、この像の人間愛に充ちた、優しい、善良な様子によって表わされ、『財産の』、『実りの』守護神という側面は、像の姿に示される飾り気のなさや大度な心が写し出そうとしている。それは、まったくのところ、恵みを授けようとしている者に似ているのである。

【78】このような点をわたしは、できうるかぎり、［彫像で］模写しようとしたのだ。なぜなら、わたしには、それらを［言葉で］言い表わす力がなかったからである。

【85】じっさいこの神［ゼウス］は、そのようにとても優しい思いやりの深い様子で、われわれのほうを眺めているように見える。だから、わたしには、今にも彼が、このような声を発して言うのではないかと思われるのだ。

（注：以下では、ディオンとその聴衆がいま目にしているゼウス像が、彼らに直接話かけてくるという趣向）

「こういう**祭礼**をお前たちは、エリス人と全ギリシアの者たちよ、**しかるべき仕方で立派に行なっている**。**お前たちの今の力に応じた供犠を盛大になし、創始以来の慣わしどおりに、この壮健さと体力と速さとを競う栄（は）えある競技を催し、祭典と密議の伝統を継承しているお前たちだ**。しかし、わたしが目にし、気がかりにさせられるのは、あの［ホメロスの句に譬えるべきお前たちの］状況である。

**お前［ギリシア］自身のことはよく世話していない**。辛い老年が

　お前を捉えていて、身なりも汚らしく、服もみすぼらしいのだから」。

（注：ホメロス『オデュッセイア』第24歌249行以下）

（岩波文庫『オデュッセイア―（下）』呉茂一訳）から。

**あんた自身に十分世話がゆき届かぬな**、そのうえ年を取りなさって、そのためみじめに、すっかり干からび、着物もひどく見とうもないのが、…。

●新宮市の横田老師が１０歳で初めて坐禅した寺で受け取った言葉：

**今も印象に残っている言葉が二つございます**。

一つは、その提唱を始める時に、目黒絶海老師は、手を合わせてみんなを見渡して、**今日ここにお集まりの皆さんは、みな仏様です**と言って拝まれたのでした。

もう一つは、**坐禅をすると、やおよろずの神々が身中に鎮座なさるのだ**という言葉でした。

「ここにお集まりの方はみんな仏様です」という言葉には驚いたものでした。…

それから、もう一つ、**坐禅するとやおよろずの神々が、身中に鎮座する**との言葉にも感銘を受けました。

なんだか、坐禅というのは、とても神聖な素晴らしい行いなのだと感じたのでした。 …

白隠禅師は、「**天神七代、地神五代、並びに八百万の神、悉く皆身中に鎭坐（ちんざ）ましませり。**」と仰せになっています。

そして白隠禅師は、**この神々をお祀りするには、禅定に入ることだとして、腰骨を立てて気を丹田に満たして、姿勢を正して坐って**、目に見るのも耳に聞こえるのも、そこに一点の妄想をまじえず、清らかになることだと説いています。

●白隠禅師の言葉：

**はにず**。… **、、にの、くにせり。**

**かくのくのをせんとせば、… をし、をにたし、せよ**。…

このにく、むべきのはぶべきのなり。めざるのはべきのなりと。るべし、むべし。

◎私の結論（決意、使命）

神をお祭りすること、全力で競うこと、これらすべての道に通ずるのが「坐禅」

「　　」　これを常に私自身生き、人にも勧め共に生きること。

（これが聖なる火を燃やし続けること）